

■特集・旅の歌■

古典の旅の歌

御手洗靖大

① 岩代^{いわしろ}の浜松^{はまの}が枝^えを引き結びま幸^{さい}くあらば
またかへりみむ

『万葉集』有間皇子

② のち見むと君が結べる岩代の小松が未^まを
またも見むかも

『万葉集』柿本人麻呂

③ 我妹子^{わがもこ}が見し輶^{こま}の浦のむろの木は常世^{とこよ}に
あれど見し人そなき

『万葉集』大伴旅人

④ われのみや夜船^{よふね}は漕ぐと思へれば沖辺^{おきへ}の
方に梶^{かぢ}の音すなり

『万葉集』遣新羅使

⑤ 唐衣^{からぎ}きつつなれにしつましあればはるば
るきぬる旅をしぞ思ふ

『古今和歌集』在原業平

⑥ 君がすむやどの梢^{すゑ}のゆくゆくと隠るるま
でにかへり見しはや

『拾遺和歌集』菅原道真

⑦ 白雲の八重にかさなる遠^{とち}にても思はむ人
に心隔つな

『古今和歌集』紀貫之

⑧ たよりあらばいかで都へ告げやらむ今日
白河の関は越えぬと

『拾遺和歌集』平兼盛

⑨ 棲^すみなれの野辺におのれは妻と寝て旅ゆ
く顔に鳴く雉^{きざり}子かな

増基『いほぬし』

⑩ やまちかく腰^{こし}のみ痛く思ほえて苦しきさ
へぞ形見^{かたみ}なりける

御形宣旨^{みかたのせんじ}『御形宣旨集』

⑪ 山吹の花のさかりに井手^{いで}に来てこのさと
人になりぬべきかな

『拾遺和歌集』惠慶

⑫ 木^このものをすみかすとすればおのづから花
見る人となりぬべきかな

『詞花和歌集』花山院

⑬ 芦の屋の昆陽^{こんやう}のわたりに日は暮れぬいづ
ちゆくらん駒にまかせて

『後拾遺和歌集』能因

⑭ 行く末を思へば悲し津の国の長柄の橋も
名は残りけり

『千載和歌集』俊頼

⑮ 年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なり
けりさやの中山

『新古今和歌集』西行

⑯ 明けばまた越ゆべき山の峰なれや空ゆく
月の末の白雲

『新古今和歌集』藤原家隆

⑰ 箱根路をわが越え来れば伊豆の海や沖の
小島に浪のよるみゆ

『続後撰和歌集』源実朝

⑱ うち時雨れふるさと思ふ袖濡れて行く先
遠き野路の篠原

『玉葉和歌集』阿仏尼

⑲ 行きくれてむなしき谷に宿とへば深きひ
ばらに風ぞこたふる

伏見院『伏見院御集』

⑳ 露消えむ尾花がもとの身のはてを思へば
ちかき武蔵野の末

心敬『心敬集』

『万葉集』の旅の歌から。①「岩代（紀伊国）の浜の松の枝を引き寄せて結び、無事であったならまた戻って見よう」は、有間皇子の物語。「岩代」とは当時から聖地であったらしい（『岩波文庫』）。その松を結ぶとは、自身の無事を祈る行為。しかし、この祈りは叶うことなく道中で処刑される。

『日本書紀』に書かれたこの悲劇は、『万葉集』でも周知の物語だったようだ。この歌の後に、この地を訪れた万葉歌人の感慨の歌が並ぶ。②「後に見ようと貴方が結んだ岩代の小松の枝を（私は）またも見るこ

とがあるうか」の人麻呂詠もその一つ。『万葉集』から歌と物語の結びついた地を巡り、その感慨が詠まれている。

大伴家持の父、旅人は、神亀五年（七二八）任地大宰府で妻を亡くし、孤独に帰京した。

③「愛する妻が見た鞆の浦のむろの木は、この世にあるが（共に）見たその人はもう居ない」。死にも接するのが旅である。

『万葉集』の旅として、遣新羅使の歌も忘れたい。天平八年（七三六）新羅に派遣された人々は、厳しい旅を余儀なくされた。新羅に至っても成果は無かった。

④「我々だけが真夜中に船を漕ぐと思つて

いたら沖うきの方に楫の音がするようだ」。深夜の海上は闇。その孤独に耐えて船を漕いでいたら、沖に他の船を漕ぐ音が聞こえてくる。孤独からの安堵と喜びが実感される。旅は道中の出会いと共に、帰るべき場所、置いてきた人を思う瞬間が必ずある。

業平の⑤「唐衣、着つけて馴れた褌、妻がいるので、張る張る、遙々やって来た、この旅を思うよ」は『伊勢物語』で語られる東下りの物語。この歌については『つながる読書』ちくまブリマー新書で書いたので参照されたいが、旅の心を隠す点に注目。道中を共にする仲間には分かる。秘密を共有することで深まる感慨がここにある。

⑥道真詠は左遷の歌「貴女が住む宿の木のその枝を、道を行きながら、隠れるまで振り返つて見たよ」。残した妻を思いながら、西国へ旅立つ後姿が見えてくる。

⑦貫之詠は、残された者の歌「白雲が幾重にかさなる遠方でも、あなたを思いやっている者（を忘れて）心を隔てないでくれ」。

貫之の階級は、地方長官として財を築くのが理想的な人生だった。この時代の文学の書き手達は、周囲や自身が出て、時にはその地で死ぬことも少なくなかった。

一代ほど後の兼盛もそのような人生だった。⑧「そんな方法があるなら、なんとか都へ伝えたい。今日白河の関は越えたと」。白河の関は陸奥のシンボル。京都の人々にとつて、この先は異世界だった。白河に到る感慨が、これ以降盛んに詠まれる。

ただし、兼盛が白河に来たかどうか疑わしい。別の歌集では、この歌は屏風に描かれた白河の関を詠んだと説明されている。ここで、歌枕を説明しておく。屏風や障子として室札に描かれたり、歌に詠まれたりした土地は、固有のイメージを象徴するものとなった。歌枕は実際に行かないのが常識であるとさえ言う人もいる。

しかし、平安の和歌が全て室内の空想によるものであったとは言えない。

実際にその地を歩いた同時代歌人が⑨⑩。増基法師の⑨は「棲すまみなれた野辺に自分は妻と寝てよそ者の旅人（私）に鳴く雉だな」。増基は、旅する歌僧の元祖と私は見ている。

鞍馬山の往還を記すのが『御形宣旨集』。⑩「山が近く腰ばかり痛く思えて、その苦しきまでも参詣のよすがなのだ。腰痛は旅をした実感無しには詠めないものだ」。

平安時代中期は、宮中では当意即妙の遊

びの歌が詠まれる一方、歌に執心する数寄(オタク)歌人も現れる。

⑪「山吹の花の盛り日に井手に来てこの里の人になっちゃおうかな」と詠む惠慶法師はその先駆的存在。井手も山吹と蛙で知られた歌枕。彼も歌枕に赴いて感慨を詠む。

この時代の和歌の帝王花山院は出家して修行の旅をする。⑫「木の下の住処にすれば自然と花見る人にきつとなれる」とは花の数寄人の振る舞いであろう。

惠慶達のグループは能因が引き継ぎ、平安後期へ和歌史を結び留める。⑬「芦の屋の昆陽の辺りに日は暮れた。私はこのままどこに行くのだろう。馬の足にまかせて」。「芦の屋の昆陽」は摂津。西行、芭蕉の憧れた彷徨の歌僧の姿である。

旅の感慨には来し方の自らの述懐も含まれる。平安後期の二首から見よう。

能因達のグループと繋がりのある俊頼の⑭「自分のこの先を思うと悲しい。津の国の長柄の橋も名は残ったのにな」。長柄の橋は摂津の歌枕となった橋。古い物の象徴だが、跡形もないようである。朽ちても名は残った橋を見て、自分はどうかだろうかと自問する。院政期を代表する大歌人となる

が、官途ははかばかしくなかったのだった。

ようやく西行に至る。⑮「年取つてまた越えるだろうなんて思つたらうか。命あつてのことよ。さやの中山」東大寺復興勸進のための生涯二度目の陸奥の旅。この時西行は六九歳、最晩年である。

平安鎌倉の動乱のさなか、帝王がもたらした和歌の時代が新古今時代。先鋭の旅の題詠(室内の空想)も取り上げよう。

定家と並称される家隆の⑯「明けたらまた越えるべき山の峰なんだろうか。空をゆき山にかかる月のあの白雲のあたり」。建仁元年(一一〇一)の歌合に出された。明日越える山を指さす旅人がありありと浮かぶ。定家の育てた將軍、実朝も忘れてはならない。⑰「箱根の山路を越えると、伊豆の海だ。沖の小島には浪がぶつかるのが見える」山道の先に開けた絶景を詠む代表歌。

これは当地に赴いて詠んだもの。この眺望は国見の歌に通じる。帝王ぶりの詠である。定家以降、孫の代に三家に分裂対立する。二条、京極、冷泉。きつかけは、相続問題だった。冷泉家の祖、為相の母阿仏尼が鎌倉幕府に赴くのが『十六夜日記』。所収歌が⑱「時雨に打たれ、京を思ふ袖は涙でさらに濡れ、

目的地は遙か、野路の篠原で」。息子の為、訴訟に赴く孤独な母の歌である。

京極家は、鎌倉末期の伏見院を中心に和歌史に残る歌人集団を形成する。中心の伏見院の歌が⑲「山路を行くに日が暮れて何も無い谷に宿を尋ねると深い檜の林から風が返事をする」。なんとも恐ろしい闇の気色。彼らは心に浮かぶ景と向き合い続け、ここまでリアルな歌を立ち上げた。

最後に室町時代の連歌師で歌人の心敬の⑳「露も消える薄の下の枯れ草のような我が身の最期を思えばその時が近い武蔵野の末」。心敬は関東に身を寄せていた。時は応仁二年(一四六八)七月。京都は応仁の乱の戦地となって帰れない。もうここで死ぬのではないか、との歌の通り、乱世に翻弄されながら京に帰ることなく客死する。

近世和歌まで紙幅が足りなかったが、一応、和歌史の旅の歌を見てきた。

歌の起こる地で名歌が詠まれ、先人の足跡を巡って感激する人を見た。そして、土地と歌とが一つになって固有の表象文化が生じた。そこには、歌とことばと景と対峙する歌人がいる。一方で、人生を歌う歌人もいたのである。

■特集・旅の歌■

「心の花」の歌人にみる近代の旅の歌

久松宏二

① わた中のかゝる島にも人すみて家もあり
けり墓もありけり

佐佐木信綱「心の花」四一六
② 種うりの翁話のたくみにて乗合小舟笑み
くつがへる

佐佐木信綱「心の花」六一十「利根川そ
ひ」
③ 旅人のむすぶしづくに濁りてももとの清
きにかへる水かな

佐佐木信綱「思草」
④ 音もなく暮れゆく山にむかふ時そゞろに
われの尊とおぼゆる

佐佐木信綱「心の花」十四一十「帆のか
げ」
⑤ 夜舟つきて一とときに客の込みあへる船宿
の秋のくらし灯火

佐佐木信綱『常磐木』
⑥ 太宰府
古への人を恋ほしみ観世音寺うしろの山
に藤の花をりつ

⑦ 立待崎に啄木の墓を訪ふ

さすらへ来て喜び見けむ海を見つつ詩人
啄木は眠りてありけり

佐佐木信綱『豊旗雲』
⑧ 二州会の人々と長良川の船の上につど
ふ

長良風美濃と尾張と二国の新うた人の清
き眉ふく

佐佐木信綱『豊旗雲』
⑨ 雨はれて青そらいでて日は照りて友おほ
くこぬ今日の旅かな

長壽吉「心の花」四一八「青梅の一日
(上)」

⑩ 不二に登るといふ心をどりと汽車の中の
人いきれとに夜も寝られず

石樽千亦「心の花」一八一八「八重雲」
⑪ 船窓のかけにしよればうれしくも波のし
ぶきのさかづきに入る

石樽千亦「潮鳴」
⑫ 薪をきる同じ調子の音さびし薪きり男唄
を謡へよ（家々の薪を切りて口を糊す

る男あり）

齋藤瀏「心の花」二一四「北蝦夷」
⑬ 京なまりの茶店の嬸とかたりけり水澤寺
のすゞしき木かけ

大村八代子「心の花」二一九「榛名高原」
⑭ 海豚の群
津軽海峡船中にて

我が船をきほひ追ひ来るいるかの群ほど
へて見ればなほし追ひ来る

川田順「山海経」
⑮ 葉桜雨
四月吉野山に遊ぶ、中千本のあたり

己に葉桜なり、翌日雨、同行二人
汽車のろく裾山ぞひを行くなべに手のと
どくところにも丹躰躰咲ける

木下利玄「一路」
⑯ 七月末つかた古里より音信ありける夕べ
燈火をともしすひまだにをしまれて君が文
よむほの暗き窓に

弘田長「心の花」十一一「獨逸より」
⑰ 人の聲高鳴りつゞく物の音四馬路の夜の

花のともし火（上海四馬路にて）

前田利定「心の花」十六―八「支那の旅にて」

⑱ あかりつげば江上彼岸一様にまちのにぎはひひろごりて行く

白岩艶子『白楊』

⑲ いつか又來むとおもへばつまぎし道の小石も親しまれけり

白岩艶子『白楊』

⑳ 窓によりてアンデスの峰の夏の雪眺めつつ旅の物語りする

石井衣子『波にかたる』

○

1. 【信綱の「旅は楽しび」という思い】

我楽しびを何ぞと問ふ人あらば、我は旅行と答へむ。

これは「心の花」三一―八 信綱の「信濃の家づと」の書き出しである。（明治三三年信綱二九歳）信綱は続ける。「知らぬ境をふみ、知らぬ人と語り、知らぬ風景をさぐり、知らぬ風俗を見、すべて知らざる事物を見聞する楽しさ、何にかハたとへいはむ。」信綱の旅の捉え方がよくわかる文章である。旅は楽しいものという思いが根底にある。（傍

線筆者以下同）知らないものを知ること。

見聞すること。風俗を見ること。旅は未知を知ることなのだ。もう一つ「心の花」九五「旅ごろも」を取り上げる。

▲旅ほど楽しいものはなく、楽しかつた思ひ出はいよ／＼楽しく、苦しかつた思ひ出もまた楽しみになります。旅で懇にされたのは、いつまでも忘れ能はぬものであります。淋しい村の旅籠屋にとまつて、雨のふる夜などは、旅のあはれ物のあはれが胸にしみ／＼としみ入るやうで、暗い行燈の下で、其日の日記をかいしるしながら、今日のこし方明日の行方を思ふ時などは、歌の泉があふれ出るやうに思はれます。

▲心の同じ友があらば共に旅行するにしく事はありませぬが、さうでなければ一人旅で道すがらの人を語り敵にして、様々の事をきくのが面白い。道づれの旅商人や僧などから色々きくのも面白く、乗合馬車も趣味の多いものです。（以下略）

旅ほど楽しいものではなく、旅を通して歌の泉があふれ出るようだ。そこには旅に対する不安はない。むしろ自ずからなる明るさがみえてくる。信綱のこの思いは、その後「心の花」十四―十で初学者に向けて語る「和歌入門」。大正十五年『旅と歌と』

の著作にもみられる。信綱が旅への思いを折りにふれ述べることで「心の花」全体に浸透するであろう。つまり「心の花」歌人の近代の旅には、信綱の自ずからなる明るさを根底にみる事ができるということだ。

2. 【「楽しき日曜日」と⑨長寿吉の歌】

「心の花」四―七に「楽しき日曜日」という小花清泉の文章がある。その冒頭部。

二十世紀のはじめの年、五つ目の月、三つ目の日曜日朝の八時飯田町發のにてと、例の待合室に待合したるは、新井君、長君、石樽君、吉田君、竹屋の君、とね子の君、糸重の君、竹柏園主人の君、同マダム君。この君たちに變人のおのれを加へて、十人一群。（略）我等はやがて、一つ車の内に座を占めつ。首席もなく、末席もなく、遠慮もなく又無用の儀式などいふものもなくして（略）心安かり。（略）さながら樂しき一族の旅行めきたり。（略）車掌が相圖の笛の聲、ひゞきそむると共に、我等の家は動きはじめぬ。車といはで家と名づけたるは、樂しき理想の家に寄りつどひて、面白き物語などする折の、嬉しき思あればなり。

後々「野遊会」として信綱が主として「心の花」では千葉などに出かけていく小旅

行。文中には、軍艦初瀬で帰朝した水兵吉田君（吉田又七）の海外旅先の実見談を聞くなど、一日が「楽しい日曜日」として描かれる。⑨はその時の長寿吉の歌である。大げさではなく今で言うピクニック風な旅への楽しい思いが自然体で詠まれる。

3. 【「心の花」消息欄にみる「旅行」】

「心の花」には消息欄がある。八―一から「会員消息」はあり、信綱の動静をはじめ会員の動向が記録される。「心の花」のバックナンバーには国内・国外様々な場所から絵葉書が届いたという記事や旅行先の記事が記録される。例えば九―十「消息」では白岩龍平同艶子ぬしが上海から湖南長沙に赴かれた由の記事と共に絵葉書が記録される。十七―九「消息」では、「去年中旅繪葉書等を寄せられたるは左の諸氏に候」として、北は札幌から南は長崎まで三七件五十六人の名前が記録される。（木下利玄・石樽千亦・前田利定・峰ゆり子等の名がある）。このように「心の花」では旅行をした会員が、信綱に絵葉書を送り近況を伝えることが習慣であった。会員はその記事を読むことで【旅行】についての情報を得る。【旅行】の情報を得ることで「旅行」についての知的関心や興味を押し広げる役割をこの

「消息」覧は果していたといえよう。「旅行」を近代に比較的自由にできた上流階級の仲間が「心の花」に所属していた。「心の花」は【旅行】が知的好奇心の所産の役割としてあったと考えてみたい。

4. 【近代の旅の歌】

本論では「心の花」の歌人にみる近代の旅の歌二十首を取り上げた。

①―⑧は信綱の歌。「樂しび」の歌である。①村の生活の中に暮をみつける。②乗合の中でのユーモアの場面。③旅人の非日常性を水の清濁にみる。④自身を見つめ直す機会としての旅。⑤灯火一つの暗闇で着船の人の喧噪。⑥太宰府への書物探索の旅先の古人への思い。⑦北海道での啄木の懐旧。とここで、第十七―九の消息欄には次のような記事がある。「園主は去月中名古屋犬山等に旅行せられ帰途函嶺に赴かれ候急速の旅行なりし爲め滞在中も二州會員に相會するの機だに得ざりし由遺憾の極に候」⑧はその二州会の新人会員を詠んだ歌。信綱は国内旅先で、会員を訪れた。以上①―⑧が旅の「樂しび」の歌。近代の旅において信綱の「樂しび」という思いは自在である。⑨―⑫は「心の花」会員の歌。⑩⑪は、汽車内の歌。⑩富士を素材とする歌は近代

短歌に多くあるが、車内の富士登山への興奮と、もわっとした空気感の共有。⑬は速度を落とした晩春初夏の生命とのふれあい。どちらもこの時代らしい感覚。⑭⑮は海上でないと見られない。穏やかさとスピード感の違いはあるが、対象をみる目に個性がある。近代の旅ならではの歌。⑯⑰は男性と女性の違い、北海道と上州という違いはあるが、旅先の異文化の出会いを受け入れた人の温もりがある。⑱⑳は海外詠。㉑㉒は女流の歌。「心の花」二十一「白楊」批評特集で松村みね子が「日本の多数の女は旅をする余裕を持ちえません。斯く申す私も僅かに京濱間二三十分の汽車に乗るのを旅行と心得てる人間でございます。」と言う。白岩や石井のような存在は「心の花」ならではなのであろう。五首とも日本人として外国を冷静に見て、日本人として外国にいる思いを詠んだ近代の外国詠。

以上見た旅の歌には、信綱にみる「樂しび」「明るさ」「温もり」が感じられる。「近代の旅」の一つのスタイルを「心の花」の歌人から見て取ることができるのである。

■特集・旅の歌■

現代の旅の歌

清水あかね

- ① 夏帽のへこみやすきを膝にのせてわが放浪はバスになじみき
寺山修司『空には本』
- ② パスポートをぶらさげている俄万智たむまぢいてもいなくても華北平原
俄万智『サラダ記念日』
- ③ 国境へ向かう鐵路の窓に立てば暗く朝焼けくる大陸か
谷岡亜紀『香港 雨の都』
- ④ ロンドンにただ一日のみさまよひしあれちのぎくのごときわれかも
水原紫苑まろむら『客人』
- ⑤ 行行重行行ゆきゆきあつあつあつあつ ワルシヤワに十一月の初雪が降る
睦月都むつきつと『Dance with the invisibles』
- ⑥ 午後の日に緑泡みどりうただちてゐるごときタイの森林地帯がつづく
佐藤佐太郎『冬木』
- ⑦ モザイクの広場をよぎりゆくとときに髪くろきわれは異邦の女
真鍋美恵子『土に低きもの』
- ⑧ 夜の八時はまだ明るくてメルル鳴くひしめきあつてよく食べる国
今野寿美『龍笛』
- ⑨ 油のような妬ましきもて立ち尽くす人頭じんがしらはるかに抱かるるイエス
永田和宏『饗庭』
- ⑩ あの川に兄が浮かんでこの沼に父が浮かんで 睡蓮咲いた
川野里子『ウオーターリリー』
- ⑪ 薄命ならざるわれ遠くきて荒海の微光をうつすコムパクト
葛原妙子『原牛』
- ⑫ みちのくの秋陽霧らへる最上川茂吉は老いてほほ笑まざりき
馬場あき子『葡萄唐草』
- ⑬ 二人よりは一人見る海一人より亡きものと見る海こそよけれ
時田さくら子『截断言』
- ⑭ あをいあをい宇曾利山湖に後ずさり消えゆくやうな夫つまと子を撮る
米川千嘉子『滝と流星』
- ⑮ 病む母を時間の谷に置くごとくいくつも小島ゆかり『六六魚』の秋の旅を行くなり
- ⑯ 母の死に逢うための旅 雨霧がゆうべの谷をしずみゆく見ゆ吉川宏志『雪の偶然』
- ⑰ 旅打ち、と渡世人なら言ふだらうG O T
○トラベルつひに始まる
栗木京子『新しき過去』
- ⑱ 緑濃き曼殊沙華の葉に屈まりてどこにも往かぬ人も旅人
伊藤一彦『海号の歌』
- ⑲ 暮れゆかぬ夕べは旅と想うなり小学校の笛が聞こえる
佐佐木幸綱『ほろほろとろとろ』
- ⑳ さやさやは風の想夫恋枯葎くわらのよみがへる頃旅に出でむか
築地正子『菜切川』

愛唱していた旅の歌を思い返したり、今まで読んだ歌集をひっくり返したりしながら「旅とは一体何なのだろうか」と自問自答を続けた。交通が発達し、地球の裏側でもすぐに行かれる現代。差し迫った用事の為に、また求道の目的で命からがら旅した昔とは、その重みが全く異なる。まして現代の旅はレジャーの要素が強いので、そこには幾分陳腐なイメージが纏いつく。

しかし、旅の歌には、現代短歌でも真摯な作品が多いように思う。そこで、先の二十首を読みながら旅について考えてみたい。

①から⑤は青春の旅の歌だ。寺山の代表作ともいえる①は放浪を歌う。人生が始まったばかりの旅は未知の世界への冒険だ。パスでする放浪に若さ、つつましさ、初々しさを感ずる。一九五〇年代、時代もまだ戦後間もない。そこから三十年経てば②で中国の大きな華北平原に立ち、己の卑小さを実感する。しかし「いてもいなくても」と詠みつつも実はそれは強烈な自我意識だ。世界と我との対峙。③の谷岡の歌も景の大きな歌だ。鉄道の小さな窓から見える大陸の大きな朝焼け。その暗い赤は生まれたばかりの世界のようだ。④の水原の歌はトラ

ンジットの合間であろうか、一日だけロンドンに滞在する自分を、どこにでも生え出す雑草のアレチノギクに喩える。白い小さな綿毛のような花に若い女性の寄る辺なさのようなものを感じさせる。⑤の睦月の歌は昨年出版された歌集に収められる。最近の若者はひと頃より海外に行かなくなつたと聞いていたが、ワルシャワに留学した時の一連があつた。「ゆきまてかまてゆまて行行重行行」は『文選』より取られた言葉だが、この歌では「こんなに遠くまで来てしまった」という作者の感慨を表す。ワルシャワという異郷にやってきた若者の高揚感を感じさせる歌だ。

先の青春歌は寺山の歌以外は海外詠だ。海外に行く事は今や一般的だが、日本人の海外渡航自由化は一九六四年。佐藤佐太郎は一九六四年早々にヨーロッパ旅行に行き、『冬木』はその折の歌を多く収める。ただ、今読むと記録的な歌が多く、読み続けると少し退屈する。しかし、やはりその描写力の確かさに感心する。⑥は行きの飛行機から見たタイの森林地帯の歌。泡立つような緑の森林が長く続く。未だかつて見たことのない光景に出会うのが旅の醍醐味だ。真鍋も一九七〇年代の初めにヨーロッパを訪

れた。⑦はそこで否応なく感じる、自分はアジア人、日本人なのだという強い意識を歌っている。日本では当たり前の黒髪が当たり前でなく、自分はファー・イーストからやってきた異邦人なのだという実感。

先の二首は海外詠の走りの頃の作品だが、一九八〇年代からは海外は随分行きやすくなり、今や毎年二〇〇〇万人近くが海外を訪れるグローバル時代を迎え、海外詠も飛躍的に増えた。⑧の今野の歌は異文化への驚きを明るく歌った。フランス旅行の折のようだが、メルルはヨーロッパでは親しみ深い鳥らしい。鳴き声が明るい鳥とよく食べる国民性。⑨の永田の歌はバチカンのピエタ像を歌つたもの。傷ついたキリストを抱いたマリアの清らかな美しさにかつて私も感銘を受けたが、幼くして母に死に別れた永田はマリアに抱かれるキリストに対して「油のような妬ましさ」を抱く。読者をたじろがせるほどの強く生々しい嫉妬心。すでに四十代後半の永田が、母に抱かれることを渴望した幼い頃にすっかり戻ってしまった。そしてこれこそが旅の効用である。日本から遠く離れた地で、日常の雑音から遮断され、日頃は心の奥底に沈め

られていた思いが叫びとなつてあふれ出す。川野の『ウォーターリリー』では、旅の行き先はほとんどが戦地や被災地だ。

⑩は戦禍の癒えないベトナムを歌う。四句までならどの国の戦跡にも当てはまるのだが、五句の睡蓮でベトナムとわかる。川野の旅は自身のテーマを追う旅。

⑪からは国内の旅の歌。⑪の葛原の歌は一九五〇年代後半に日本海を旅した折の歌。五十歳を迎えた葛原は、旅に来て人生半ばを過ぎた自分と向き合う。「遠くまで」に人生の感慨を込め、「コムバクト」の字足らずで感傷を突き放す。⑫の馬場は最上川に来て、茂吉とその歌に出会う。旅の喜びの一つに、作品の現場を見、文豪や先輩歌人に出会い直すというのがある。最上川の歌は茂吉晩年の代表作だが、馬場は現場で老いた茂吉の苦悩を想った。⑬の詩田の歌は亡き人との旅を詠む。旅で亡き人の存在を強く感じるといふのはよく分かる。日常の雑事から離れ、一人ものを考える時間が持てるからであろう。いったん空にした頭には奥底から湧き上がってくる想念がある。

また、現代には様々なグループ旅行があるが、これらは詠みようによっては陳腐に

なつてしまう。家族旅行もその一つだが、⑭の米川の歌は違う。旅先は青森の恐山にある宇曾利山湖。そこでお決まりの記念写真を作者が撮るのだが、目の前にいる夫と子が消えてゆくように見える。非日常の空間に来てふいに揺らいでしまった家族の存在。最も確かなはずの関係は実はそう確かなものではない、ということにふいに気付かされた。⑮の小島の歌は、病気の母を置いてゆく旅を詠む。古代より旅の歌では残してゆく家族への想いがよく詠まれるが、

小島の歌は母をエアポケットに置いて、幾つもの旅をするというドライさが現代的だ。しかしそれは不安や罪悪感がないのは決してない。吉川の⑯は母危篤の報を受けての帰郷を詠んだ連作の一首目。茂吉の「死にたまふ母」が意識されるが、茂吉の列車に対し、吉川は飛行機の移動であろう。機上からの景が深く沈静する気分を表す。これは目的のある、しなければならぬ旅。コロナ禍により、移動が大幅に制限され、不可欠な旅さえできなくなつた。移動が必要な職業は商売上がつたりだ。それがやっと緩和されたことを、栗木は⑰で、各地を渡り歩いて博打を打つた昔の渡世人なら、

すぐにGOTOトラベルを使って旅打ちに出かけるだろう、と詠んだ。移動制限というものの過酷さを機知を用いて表現した。

⑱からは旅を考察させる歌。伊藤の⑲の旅人である人は、どこにも往かない人。どこにも往かなくても人間は留まることな変化し、百年以内にこの世からいなくなる。だから旅人なのだ。佐佐木の⑳はヨーロッパ滞在の折の一首。高緯度の国では、夏は九時を過ぎても暗くならない。暮れそうで暮れない不思議な時間が長く続く。そこに聞こえてくる笛の音。その心細いようなノスタルジックな時間を「旅」と表現している。築地の㉑は旅を求める心を詠んだ。枯れた葦がよみがえる春には旅に出たい。そこには、もちろん自らの再生を願う気持ちも込められている。無性に旅に出たくなるのは新たな気持ちになりたい時だ。

孤独で、自由で、刻々と変化するのが生命の本質。しかし日常はそれを上手く覆い隠してしまう。まして現代社会は忙しく雑音が多い。その日常から離れ、本来の生命感覚を取り戻す。――孤独で自由な自分に戻り、思索し、発見し、確認する――そんな旅の時間が多くの優れた歌を生む。

■特集・旅の歌■

現代の旅の歌

梅原ひろみ

① 整備士が滑走路から手を振ってきつと見えないけど振り返す
岡本真帆『水上バス浅草行き』

② 窓側の2Aのここに数々の人が朝日を浴びいし時間
今井恵子『運ぶ眼、運ばれる眼』

③ 一日の旅の火照りをともに抱くバイクを車庫に眠らしめけり
佐藤博之『残照の港』

④ 歩いたらどれほどかかることだろうあの犬がいるゲルに着くまで
土岐友浩

⑤ 揚げ餃子^{ホシ}手づかみで食む指の間を油がへ今^{イマ}が滴り落ちる
大森静佳・同

⑥ 炎天のサイゴンの汗の米兵長身を折って長靴の紐結びびいる
佐佐木幸綱『群黎』

⑦ 老人のいない空港 戦争に殺されし者に待つ便はなく

『ほろほろとるところ』
⑧ 知らずしてわれも撃ちしや春闈^{はる}くるバーミアンの野にみ仏在さず

皇后美智子妃『瀬音 増補改訂版』
⑨ 曇天を見上げて飲みしラッシーのすっぱさ舌にヴァアラナシを発つ
江戸雪『百合オイル』

⑩ たまきはるボナバルト書店にまたゆかむアジアの女ちひさくとも魔ぞ
水原紫苑^{はら}『快樂』

⑪ ウメハラの絵の傾斜まさに誇張ならず祈年殿瑠璃の屋根ふりあふぐ
石川不二子『高谷』

⑫ 家ふかく暗きうしほを引き入れて伊根の舟屋はやすらかに古る
竹山広『残響』

⑬ 湖東にて近江牛食ひ湖西にて鯖寿司食へり旅は飲食^{おんじき}
高野公彦『河骨川』

⑭ 水牛は強きゆゑ車曳くなれと哀しめど乗りて海瀬^{うみせ}を渡る
馬場あき子『南島』

⑮ 通勤はわが旅にして朝霧のいまだ漂ふ谿^{たに}ひとつ越ゆ

大辻隆弘『景德鎮』
⑯ アラスカまで往きて還りし四年間のこの身の一切^{いそごと}にもあり
伊藤一彦『新月の蜜』

⑰ はやぶさの次はひかりに乗り換えてきみがまばゆく南下して来る
Iaron*『イマジナシオン』

⑱ 歯を磨くたびにあなたを発つ夜汽車その一両を思うのでした
笹川諒『水の聖歌隊』

⑲ 流亡のおもひに見をりかたはらの夫に流るるトンネルの灯を
竹山妙子『さくらを仰ぐ』

⑳ 人生とう旅の中なる旅先に柿の実あかき村一つ過ぐ
大下一真『掃葉』

旅といえはまず徒歩、の長い時代を経て、近代に鉄道網が広がってからも歩く旅はしばらく続いた。牧水の姿や商用の旅など、男性の姿が思い浮かぶが、宮本常一の『忘れられた日本人』には西日本の農村の娘たちが嫁入り前に「世間を知る」目的で、伊勢まいりやお遍路、季節の出稼ぎなどのために連れだつて旅した話が出てくる。「世間を知らん娘は嫁にもらいてがのうての、あれは寵（か）の前行儀しか知らんちうて、世間をしておらんとどうしても考えが狭まうなりますすけにのう、わしや十九の年に四国をまわつたことがありました」と山口・周防大島出身の宮本の叔母が語る。お金がないので徒歩の旅だ。楽しみはあちこちでできる道連れであつたという。

現代人は近代以前と比べ各段に増えた移動手段を駆使し、行動範囲を広げて様々な目的で旅をする。歌を通して現代の旅の様子をみてみよう。

日常・非日常

①から③の歌の移動手段は、飛行機・鉄道・バイク。出発・移動中・帰宅後の「今」を、独自の切り口と文体で詠っている。

①は旅立ちの心弾みと共に、遠く見分け難い相手への思いやりが温かい。行きずりの

出会いにも人懐かしさを感じる、旅らしい場面だ。②を収める歌集は、歩行と乗物の場合では「風景や人や音や匂いに対面する心の動きが違う気がする」ことを確認したいという明確なテーマを持つ。「ここではないどこか」への憧れとは違った、現代歌人ならではの旅の動機だ。③は一日を共に走つたバイクの余熱を「火照り」として身体的に捉え、相棒ともども旅の高揚を鎮めて静かに日常に戻ろうとする姿が印象的。

④、⑤は歌人二人によるモンゴル旅行の連作より。眼の前に広がる果てしない非日常の空間。飼われている犬が小さく見えるのか、吠える声が聞こえるのか、ゲルに営まれるささやかな日常がそこにある。大森が異国の食に掴み取る「今」の力強さ。言葉が切り取つた瞬間を一層あざやかに輝かせるのは、旅の非日常性だ。

時を跨いで

⑥、⑦は四十四年の時間を挟んだ、ベトナム旅行でのスナップショット。好奇心旺盛な若者の目撃した一九六六年のサイゴン、戦争のさなかにあつた。二〇一〇年、再び赴いたかの地に米兵はもうおらず、空港に老人の姿は見当たらない。その世代の多くが戦争で亡くなったのだ。昨年の『短

歌』九月号に、⑥と同時期の旅を追憶した「アンコールワットへの道 象に乗る若かりし私の写真が残る」が載つた。旅に出るとは、歴史を知ることであり、自身の歴史をつくる営みでもある。

⑧は二〇〇一年の作。この年の二月、アフガニスタンのバミアン渓谷にある世界遺産の大仏がタリバンによつて破壊された。かつて訪れたその地と仏を、今まさに再訪するように心に描く。集中には一九七一年の「バミアンの月ほのあかく石仏は御貌削（みかほそ）がれて立ち給ひけり」があり、三十年の時を経た感慨と、深い内省に胸を突かれた。

女性三人、旅を楽しむ

⑨、ラッシーはインドで飲まれるヨーグルトベースの飲料で、さっぱりとした酸味が特徴。ヴァラナシはガンジス川の沐浴や火葬場で有名なヒンドゥー教の聖地。雑踏のなか、軽やかに旅する姿。⑩、長期滞在したフランスで通つた書店だろうか。「たまきはる」は普通「命」や「世」にかかると、大胆な枕詞の使い方が、「ボナパルト」の一生を驚掴みにし、自身の生の充実も重ねて勢いがある。下句でも異邦人であることを存分に楽しんでいる。⑪、北京

の天壇公園の祈年殿を仰ぎ、画家・梅原龍三郎の『雲中天壇』の建物の傾きは、こうやって見上げた時のスケールそのものだったと知った驚きが、字余りの表現に溢れ出ている。画像や動画で簡単に観た気になれる現代、ホンモノの迫力が伝わってくる。

竹山広の山陰旅行

海外の旅の歌が続いた。竹山広に「海外を旅する歌に興味なき偏屈ぢぢいでもよろしいか」(『空の空』)があつて、「心の花」初出で読んだ際に海外にいた筆者はニンマリしたものだ。その竹山が八十一歳の時に「心の花」二〇〇一年九月号の特集「竹山広を読む」の中で、「旅行できたら行きたいところは」と問われて「もし行けるとしたら、日程をゆっくり組んで山陰をもう一度旅したい」と、津和野、三瓶など挙げたあと「少し欲を出して丹後半島を外回りで伊根まで行くこと」と答えている。丹後半島は第三歌集『残響』の、⑫を含む「丹後」十四首の連作でのびやかに詠われた。六十六歳の作。「用ありてゆく旅ならず蕎麦の店あればのどかに蕎麦を吸りて」など、目的のない旅ならではの緩やかな時間、読む者の気分も明るむ。⑬、日本はどこへ行っても食べ物が美味しい！琵琶湖の

岸のどちら側にも美味しいものがある。弥次さん喜多さんの時代から変わらず、旅の醍醐味の一つは確かに食にある。⑭、西表島と水牛車の渡りで繋がる由布島を訪れた一コマ。どっしりした体躯ゆえに重い荷を曳かされて島と島を行き来する水牛を哀しみつつ、結局それに乗って今、浅い海を渡っている馬場あき子の姿がどことなくユーモラスだ。

日常のなかの旅

ここまでは日常からの離脱を目指す、一般的な意味での旅だったが、それ以外の旅を幾つか。⑮、典型的な日常である通勤をも非日常の旅と捉え、感性を研ぎ澄ませている。「谿ひとつ越ゆ」の心持ちは、牧水の「幾山河越え去りゆかば」にも通じるのではない。⑯で、はるばると「往きて還る主体は、皿に載る鮭。行先はアラスカ、四年の長旅だ。究極の日常である日々の食卓にも非日常を見出すのが詩人の目だ。伊藤には「緑濃き曼殊沙華の葉に屈まりてどこにも往かぬ人も旅人」(『海号の歌』)もある。⑰、旅をするのは自分ではなく、会いに来る「きみ」。新幹線の名をうまく活かして、現在進行形で一息に詠む。きみとともにも東北を発つて、私の心も旅をする。

⑱、「あなたを発つ夜汽車」は現実のあなたの身体を発ち、夢の世界へ魂を連れていくのだろうか。歯を磨く私も、眠るあなたも、動かずに一とこににいるが、銀河鉄道に乗ったかのような遙かな旅を思わせて美しい。

人生という旅

⑲、辛苦の多い生涯を共にした竹山妙子と広の夫妻。移動の車内にトンネル内の灯りが差しては過ぎ、窓際に座る夫の横顔の上に明滅する。助け合い支え合うのはお互いしかないという、不意に萌した切実な感情が「流亡のおもひ」の語に捉えられている。二人きりで歩む生の断崖。唯一無二の同行者がいる僥倖と、それゆえの喪失への恐れ。旅で生まれた一首が、生きるとはそれ自身が旅であることを痛切に照らし出した。⑳、人生は旅、と思いつつ行く秋の村。人生もそろそろ秋に差し掛かった頃だろうか。一浮の景に柿の実が赤く小さく、くつきりと浮かんでいる。柿は、穏やかな日常や郷愁を呼び起こしながら、人生の旅を彩っている。